

# 未来への文化遺産～世界に誇る野外博物館北海道開拓の村

## 第1回 北海道開拓の村の誕生

野外博物館北海道開拓の村 館長(学芸員)  
一般財団法人北海道歴史文化財団 事業本部長

**中島 宏一** (なかじま こういち)

1992年、財団法人北海道開拓の村(現、一般財団法人北海道歴史文化財団)入職。北海道開拓の村で学芸員として勤務。2016年より現職。



### 1 はじめに

「北海道は歴史が浅いから」などと時々耳にします。「とんでもないっ」と言いたいです。

北海道はるか昔の縄文文化から続縄文、オホーツクに擦文、そしてアイヌ文化と歴史を刻んで、近代、現代へと歩んできました。この7月、道内と東北の縄文文化遺跡が世界文化遺産\*に指定されたのは記憶に新しいと思います。これを機に大陸や本州方面との交流が太古の昔からあった北海道の歴史を、私たち道民は振りかえってみてはどうでしょうか。

さて、私たちが暮らすこの北の大地が蝦夷地から北海道へと改名され、北海道を管轄する行政機関の「開拓使」が札幌に置かれて以降、欧米の先進技術を積極的かつ直接的に導入して北海道の近代化は急速に進められました。

それから100年を経た1968(昭和43)年、札幌市の人口が100万人を目の前にして東京以北最大の都市へと発展し、「北海道百年記念式典」が盛大に開催されました。本州以南では「明治100年記念事業」が各地で開催され、府県の旗が制定されたり府県立の博物館建設の動きが活発になったのはこの頃です。

北海道では、前年に現在の道旗が制定され、「北海道百年記念事業」として、札幌市の東端に記念施設地区を設定し、「百年記念塔」「北海道開拓記念館」を建設、そして野外博物館設置の構想が本格化することになりました。

\*「北海道・北東北の縄文遺跡群」

### 2 北海道初の野外博物館誕生

1983(昭和58)年4月16日、北海道立自然公園野幌森林公園内の54haに及ぶ広大な敷地に、明治・大正期に建築された15棟の歴史建造物を擁し、北海道初の野外博物館、「北海道開拓の村」が誕生しました。

オープン当日は雲一つない青空のもとで開村式を迎え、入口広場では堂垣内尚弘知事(当時)や地域住民等によってテープカットが行われました。同時に花火が高く打ち上げられ、近郊の小野幌小学校の児童150名と北海道服飾専門学校の生徒15名によって空高く風船があげられ、北海道警察ブラスバンドのファンファーレが村内に鳴り響きました。そして、ブラスバンドを先頭に児童生徒200名が村内を行進しました。この祝賀パレードの後、鉄道唱歌が流れるなか本格的に再現された馬車鉄道が出発していきました。

晴れ晴れしく迎えたオープン当日は、道内各地から大勢の来村者が訪れ、チケットを販売する発券窓口では“つり銭”が足りなくなるハプニングもありました。

この年、土曜、日曜日ともなると広い村内には歴史的建造物と豊かな自然を求める人々で大変な賑わいを見せ、8月13日には早くも入村者30万人を達成しまし



オープン当初の北海道開拓の村

た。結局この年は約47万人が来村し、北海道開拓の村に対する道民の関心の高さをうかがい知ることができました。

### 3 野外博物館構想の具体

野外博物館建設の構想は、1965（昭和40）年に始まりました。北海道は、1962（同37）年から北海道百年記念事業の検討を進め、百年記念塔、北海道開拓記念館と並んで初めて「開拓記念建造物村」の配置を予定しました。そして、1966（同41）年に決定した「北海道百年記念事業実施方針」を経て、同年に報告された「北海道百年杵地区基本計画の研究」では、記念塔及び開拓記念館設置予定地点から南東方向に延びる森林公園内の皆伐地帯内に、「開拓に由緒ある建造物」を散発的に移設、設置した「野外博物館（OPEN AIR MUSEUM）または公園博物館（PARK MUSEUM）」を設置する構想が提示されました。

1971（昭和46）年4月に北海道開拓記念館が開館すると、同年8月には「道立自然公園野幌森林公園計画（利用計画）」が改正され、百年記念塔、開拓記念館等と並んで、新たに「野外博物館」を設置する計画が告示されました。

こうした動きと並行して、札幌市内では建造物の解体・収集は既に行われていて、1969（昭和44）年の旧開拓使工業局庁舎（大通東2丁目）をはじめ、翌年以降山口家と樋口家（厚別町）、南一条交番（中央区創

成橋）が収集されました。

そして、1972（昭和47）年に北海道は「北海道開拓の村（仮称）建設基本構想（案）」をまとめ、ここに初めて「北海道開拓の村」の名称と約54haに及ぶ建設規模、野外博物館的施設と「北海道開拓の歴史を後世に伝えるための施設」という性格づけがなされました。

### 4 日本の野外博物館

日本において、歴史的建造物を一か所に移築、集約した北海道開拓の村のような施設は、1962（昭和37）年大阪府豊中市の服部緑地公園内に設置された「日本民家集落博物館」が最初です。その後、博物館明治村（愛知県犬山市）、川崎市立日本民家園、三溪園（横浜市）、福島市民家園、江戸東京たても園（東京都小金井市）等が設置され、現在国内には大小含めて約40の施設を数えます。北海道では、北海道開拓の村と博物館網走監獄（網走市）、平取町アイヌ文化博物館の外に復元したアイヌのチセ群もこのカテゴリーに入るでしょう。

この中で、比較的規模が大きく、博物館専門職員の学芸員が配置され、博物館の機能を備えた12の施設で構成された組織として、「全国文化財集落施設協議会（通称：野外博物館ネットワーク）」があります。もちろん北海道開拓の村も加盟して、次々にやってくる課題に対して情報共有と知恵を出し合いながら解決に取り組んでいます。

これらの施設は、歴史的建造物を単に移築復元しただけではありません。そこには建造物に暮らした人々の暮らしぶりを再現する趣向が凝らされ、来園する人々の心を癒します。

例えば川崎市立日本民家園では、定期的に「床上公開の日」を設け、当園のボランティアが建物内の囲炉裏に火を入れ、掃除等をしながら来園者と語り合い、ある時は学芸員と一緒に障子貼りをしたりして昔の農村風景を演出しています。



解体時の開拓使工業局庁舎



復元した旧開拓使工業局庁舎



障子貼りをするボランティア（川崎市立日本民家園）

それでは、私がいふ世界に誇る野外博物館北海道開拓の村の話題に戻りましょう。

### 5 専門チームを編成して建設工事に助言

北海道開拓の村は、実に多くのプロセスを経て、慎重に準備がなされ、オープンへと歩みました。建設工事は1977（昭和52）年6月から始められ、建設にあたっては1973（同48）年に北海道知事が委嘱した「北海道開拓の村（仮称）建設協議会」（～1977）を皮切りに編成された専門チームの助言のもとに進められました。

「開拓の村建設プロジェクトチーム」は「開拓の村基本計画に基づき、開拓の村の基盤整備、収集展示、管理運営等に関する事項について調査検討し、実施計画を策定する」ことを目的として1978（昭和53）年に編成され、「開拓の村建設推進連絡会議」ではプロジェクトチームの検討結果を活かしながら、1979（同54）年に「北海道開拓の村基本構想（案）」を取りまとめました。

建造物の収集と復元、内部展示、管理運営の方針と実施構想等を調査、協議する「開拓の村建設企画委員会」では「北海道開拓の村基本構想（案）」を作成し、本構想（案）と後に取りまとめた「北海道開拓の村展示構想」をもとに、1980（昭和55）年に最終段階となる「北海道開拓の村実施計画」が示されました。「開拓の村建設の目的」「位置づけ」「展示計画」「管理運営計画」「建設計画」「馬車鉄道建設計画」等で構成された本計画書によって、開拓の村の全体像と整備の方法が明らかになり、以降毎年修正を加えながら整備事業が進められていくことになります。



解体・収集前の青山家住宅



収集時と同じように建造物群を配置した旧青山家漁家住宅

### 6 建造物の調査収集と資料の整理

現在、北海道開拓の村には52棟の歴史的建造物を復元、再現しています。これらの建造物はどのようにして収集されたのでしょうか。

まずは、札幌市内の再開発により収集した旧開拓使工業庁舎や南一条交番等がありますが、具体的には「プロジェクトチーム」発足後、本チームが建築物の調査を進めるにあたり、開拓の村にふさわしい建築物に関する情報を広く入手する必要と建築物の収集について協力を得るために、1978（昭和53）年に道内で20人の「北海道開拓の村建築物収集協力員」が委嘱され、建造物の収集作業が進められました。

収集する建造物が決定したら、ただ単に札幌へ持ってくるわけではありません。当時の北海道開拓記念館の学芸員が手分けして、その建物の現況、増改築や移転といった変遷の建築学的調査、建物内部やその周辺の再現にあたっての聞き取り調査等を行いました。

建造物を解体、収集する際には、その家で古くから使い続けてきた生活や産業用具、文書や写真等も寄贈を受けて収集しました。建造物の中に入ると、あたかも住人が住んでいるかのような雰囲気を感じ出すのは、こうして収集した生活用具を収集前と同じように配置して展示しているからです。

また、収集に際しては、現地で解体して札幌まで輸送し、仮の置き場に格納するのが原則でしたが、南一条交番や信濃神社は解体せずにトレーラーで輸送しました。



収集間際の南一条交番



トレーラーで輸送される南一条交番

## 7 考え抜かれた展示の構成

北海道開拓の村を計画された当時の関係者の方々の情熱には頭が下がります。

建造物の配置に見られる展示構成は歴史的建造物を単に収集し設置したわけではありません。また、建造物の周辺や自然情景にも仕組みが施され、趣向を凝らしています。

北海道の近代化過程を再現するうえで、北海道開拓の村では産業発達の視野から展示を分類しました。まず、明治初期から昭和に至る基幹産業として、漁業、農業、林業の第一次産業が確立して、これらには初期的村落が形成されます。したがって、漁業、農業、林業の三大生産地、原料供給地としてのテーマ展示が可能になります。これに対して、これらの需要地であり消費地として「町」の形成が位置づけられます。当時の風俗・文化・産業・行政の実情が細かに展開することによって、明治大正期の市街が形成され、三者の供給地と一体となって「北海道開拓の村」の全貌を現出します。このような視点から、北海道開拓の村は市街地群・漁村群・農村群・山村群の4つの群で構成されているわけです。

また、北海道開拓の村は村全体が展示であるので、移築保存されている建造物のもとより、それらに続く外景や周辺の環境、営まれる時間そのものが展示の対象となります。村内に電柱や電線、共同水栓やポスト、畑地や牧野があるのはそのためです。動く展示として運行している馬車鉄道も当時の情景再現の一つです。



鋳物で製作された赤い円柱型ポストと製作風景



鉄道車両工場で作られた馬車鉄道の車両

## 8 未来への文化遺産～世界に誇る野外博物館北海道開拓の村

北海道開拓の村の玄関「旧札幌停車場」を抜けるともう別世界。明治・大正時代にタイムスリップしたような雰囲気になります。目の前にそびえるのはハイカラなデザインと配色が施された「旧開拓使札幌本庁舎」。私たちの視界に広がる市街地群は、商店街、職人街、学校住宅街、官庁街で構成され、洋風の建物もあれば近世の遺構が残る商家建築があり、町の中央を馬車鉄道が走り、冬には馬そりが“シャンシャン”と馬鈴を鳴らしながら走ります。漁村群では北海道オリジナルと言われる番屋建築を中心とした一大ニシン漁場を形成し、農村群に進めば本州府県の建築様式をそのまま取り入れた農家住宅がある一方で洋風の酪農畜舎を配し、一番奥には移住者が最初の住まいとした開拓小屋を再現しています。うっそうとした森林の山村群を歩けば、夕張の森を走っていた森林鉄道の機関車が展示され、鉄道ファンを魅了します。

このほか、村内を歩くと囲炉裏と煙出しがある家が農村群に目立ち、市街地群には煙突がある家が見受けられます。ストーブが普及する前の暖の採る冬の暮らしから薪ストーブが庶民に行き渡り、部屋全体を暖める暖房へと変化していく様子が理解できるのです。

さまざまな仕掛けが施され、見れば見るほど人々の興味関心を誘う北海道開拓の村。

今回は、開拓の村に復元、再現された建造物を通して、欧米文化の影響を受けた建築様式や日本の伝統家屋の話題などを紹介します。



北海道開拓の村の市街地群